

# 論 文 要 旨

氏 名： 三和 元

論 文 題 目： 日本アルミニウム産業  
製錬業の盛衰と加工業の現況

## (内容の要旨)

日本アルミニウム製錬業は1970年代には世界第3位の規模に達したが、原油高騰と円高によって国際競争力を失い製錬から撤退する企業が相次ぎ、1987年以降は1工場が残るのみとなり、最後の工場も2014年に操業を停止した。類例の少ない近代工業の興隆と衰退の歴史過程を、産業史・経営史・経済政策史の観点から分析し、製錬撤退後も発展を続けたアルミニウム圧延加工産業の現状を検討する。

第1章では、世界のアルミニウム産業の発達史と現状を概観し日本アルミニウム産業の特質を確認する。

第2章では日本アルミニウム産業の発展過程を高度経済成長期までの興隆期を対象に分析する。そこでは、参入障壁を克服しながら製錬業に新規参入した3社の経営戦略評価が中心課題になる。

第3章では、1970年代のドルショックとオイルショックによって衰退期に入った製錬業がどのような経営環境悪化に直面し、コスト引き下げのためにどのような企業努力を重ねたかを検討する。

第4章では、経営困難に陥った製錬業に対して、通商産業省をはじめとする政策担当者がどのようなアルミニウム産業政策を展開したかを分析する。そこでは産業保護政策から積極的産業調整政策への転換過程の解明とそれぞれの政策の政策効果の評価が課題となる。

第5章では、国内製錬衰退後に地金の安定供給を支える柱になった地金開発輸入の実態とその役割を主要な分析対象とする。

第6章では、国内アルミニウム製品需要の拡大に対応して、輸入地金と再生地金を原料としながら発展を続けたアルミニウム加工業の現状を分析する。自動車・家電産業が海外に生産拠点を設ける動きとともに、部品加工業も海外に進出する実態も解明する。

終章では、製品論と資源論の観点から、アルミニウム産業の将来を展望する。製品論としては、リニアモーターカーや蓄電池などの分野で新しい需要が拡大する可能性があると同時に、超高張力鋼や炭素繊維の開発で市場を脅かされる可能性があることにも配慮し、新需要分野の開拓への努力が必要な時期に入ったことを指摘する。資源論からは、賦存量が大きく、リサイクルが容易なアルミニウムは資源限界に直面する可能性は比較的低いが、先進諸国では例を見ない地金自給率ゼロ状態となった日本は、資源ナショナリズムの高揚と国際資源メジャーの独占が進む世界的環境の中で、基礎素材の安定的確保のための資源政策への取り組みが必要であることを強調した。

[キーワード： アルミニウム 製錬 開発輸入 発展 衰退]